

月曜評論

発行所
東京都渋谷区千駄ヶ谷1-9-9
郵便番号 151 電話 402-3646
株式会社月曜評論社
編集兼発行人 橋本 繁雄
振替口座番号 東京168103
1部60円 1年3,000円(送料共)

昭和49年7月1日 第179号 (毎週月曜刊) 昭和46年2月23日第3種郵便物認可

批林批孔の長い暑い夏

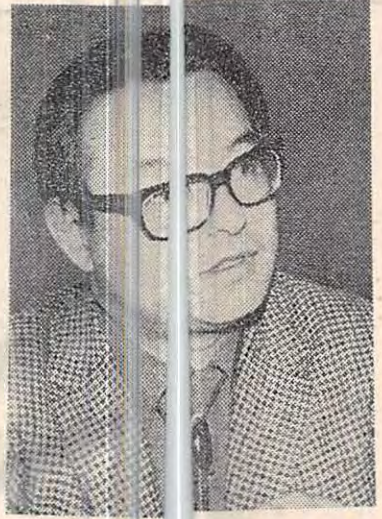
北京のロイター電(六月十八日)が伝えるところによると、指導部批判のキャンペーンはさらに激しくなり、「中国は政治的な長い暑い夏を迎えることになりそうだ」と、中国の高官たちが語ったという。そのようなとき、この政治・外交の第一線に精力的に復帰しはじめた鄧小平・周總理とは対照的に、その第一線から「後退」している周恩来總理に、健康上の理由から周恩来總理の職務を軽減する決定が党中央政治局会議でなされた。一九五九年四月、大躍進政策挫折のために毛沢東が国家主席の職務を劉少奇と交替させるを得なかった状況を思い起こさせるドラマである。いすれにせよ、慶新聞などにあらわしに「批林批孔」運動の行方について、つづいては、毛沢東の意図を批判するものが注目を集めている。この「批林批孔」運動の行方について、つづいては、毛沢東の意図を批判するものが注目を集めている。

批林批孔の長い暑い夏

江青がその主任に、張春橋、姚文元が副主任に、王洪文が顧問になっているとの情報もあり、もしもそれが真実なら、かつて陳伯達を組長とし、江青を第一副組長、康生を顧問として、張春橋、姚文元らが、のちに極左派として失脚した王力、戚本禹、閻錫林、林杰らとともに結集した「文革小組」を思

「批林批孔」運動の行方

中共にまた激動の季節か



中嶋 嶺雄

唯一人の党副主席になつた林彪を列例と、毛沢東、鄧小平、周恩来という序列が目立つた。中央・地方の政府・党機関の各種ホストの空白、陳楚辭日大使をはじめとする多くの在外公館幹部の本拠地、文化大革命の中心地、周知の「批林批孔」運動の行方について、つづいては、毛沢東の意図を批判するものが注目を集めている。

疑問

疑われない。従って、「批林批孔」運動そのものがきわめて恣意的な政治キャンペーンだといえるのであり、「批林批孔」の看板の裏側では、今日の中国の政治状況を反映した複雑な潮流がうごめいているのであり、このような状況は、毛沢東以後への時代が近づきつつある今日だけに、今後ますます鮮明な曲折したものになるであろう。

王胡の政府機関と文化部門にもぐりこんで、反革命的復讐を試みた「儒生たち」とか「世論をつくりあげ、それにおもねる」とか、「国際的規模での階級闘争を志知した『現主義』」とか「媚外外交」とか、「孔家」の「明暗」は、しゃべるだけで書かず、なにも著作を残さなかった「等々、いかにも周恩来に当てはめて愛憎する批判が多かつたのである。そして、先の余凡論では、「中庸の道」や「大衆の研鑽」を反革命階級の道であり、陰謀家の人をあらわす道であるとして激しく批判し、一面で能力を考えたとき、公然たる周批判(さ)には周本人にまでいたるかどうかはやはり問題であり、まさに今後の動向が注目されるのである。そして、今回の「批林批孔」運動にどうして、周恩来批判が含意されているとすれば、その最大の理由は、毛沢東個人を専制暴君、つまり「現代の始皇帝」として、「孔孟の道」を歩む者として、周の道に「批林批孔」の反革命階級の道、「八五七二」の「紅衛」を林彪の罪状を示すものとして、周に流布させたこと、周恩来がかわっているからである。そもそも、

月曜寸言

フランスが核実験を行なった十七日の午後、こんどは皮肉にも中国が予告なしの核実験を行なった。新聞は最大級の文句を連ねてフランスを攻撃したが、フランスを攻撃するのと同じ論法で、核実験を遂行した中国にも抗議すべきであろうから、まさに皮肉な事態が生じたといわざるを得ない。十八日週刊の「朝日」は社説で、仏・中兩國が、「核軍縮討論に加わろうとしないこと」にわれわれは強い不満を感じている」といっている。併せて、第一面には例によつて北京特派員の解説を載せ、「いすれにせよ、中国の核実験は、軍縮を語りながらも、実際、甘いのはどうしたわけか知らな

文化大革命を推進させようとした人たちに、つづいては、毛沢東の意図を批判するものが注目を集めている。

現代の始皇

もどより、以上のような「周恩来批判」の反潮流が、今後、さらに高揚し、拡大し、周恩来が劉少奇や林彪のたどった道を歩むことになるのかどうかは判断できない。今日の中国におけるキー・パソンとしての周恩来の役割りと